

# 山と博物館

第49巻 第7号 2004年7月25日

市立大町山岳博物館

大町市制施行50周年記念

特集 森下 恭写真展「大いなる黒部」

第Ⅰ期【水】 7月10日(土)~8月13日(金) / 第Ⅱ期【岩】 8月14日(土)~9月5日(日)



「薬師岳と夏雲」 源流への道で見た

撮影 森下 恭

## 森下 恭写真展の開催

大町山岳博物館

森下恭(もりしたきょう)氏は黒部の「源流」域に魅せられた写真家です。

二十年以上にわたって、その只中に独り在り、その本質を自らに問いつづけ、写真に表現しつづけてきました。

天上と地上の交歓……

森下氏は今、黒部源流に「水」という命の源を見、その永遠に循環する表徴を悟り、黒部への執拗なこだわりを「水」の本質をあまねく知らしめる使命へと昇華させた感があります。

出展予定の作品群は、それゆえに黒部の写真であり、黒部を超越した世界を想起させます。

水とは、大地とは、そして命とは何か……

大町市制施行五十周年を記念して黒部の玄関口・大町で開催される本展は、黒部を知り、そしてこの地球という惑星の環境にまで思いを巡らせる良き場となることでしょう。

ご高覧のほど、お願い申し上げます。

なお本展は「水」と「岩」をテーマに二期で構成し、各期の冒頭に作者と科学者との対談「山博清談」を開催します。

第一回は七月十一日(日)午後二時より。

「水の巡り ―雪氷学から見た黒部の表情―」と題し、飯田肇氏(立山カルデラ砂防博物館学芸員)をゲストに迎え開催しました。

第二回は八月十五日(日)午後二時より。

「岩の来歴 ―黒部を巡る地質学最新の成果から―」と題し、原山智氏(信州大学理学部地質科学科教授)をゲストに迎えます。

写真家の目と科学者の目が同時に作品に注がれ語り合うとき、「黒部」はますます多次元の厚みをもって私たちに迫り来るものと期待しています。

ご参集のほど、重ねてお願い申し上げます。

# 大いなる黒部

森 下 恭

はじめに

山で写真を撮りはじめたころ、鹿島槍ヶ岳にはよく通いました。学生時代に、中綱湖の民宿でよく遊んだので、何となく馴染んでいたので、鹿島槍ヶ岳の秀麗さに、なぜか強く心惹かれるものがあったからでした。里から眺めるだけでは物足りず、それがどんなところか知りたくて、四季を通して入りました。そこで見えたもの、見たものなどをもとに、一九八一年に写真展「稜線彩映」を催しました。山の形に囚われることなく、自由な捉え方で北アルプスを表現したいという思いを込めていました。その写真展で、ある程度手応えがありましたので、次のテーマに進むことにしました。

山そのものよりも、自然の豊かなところとして、北アルプスを捉えたいという方向がだんだん明確になってきました。山頂や稜線からだけではどうしても見方が限られてしまふ。という印象がありましたので、点と線ではなくて、面的に動ける所の方がいいと考えました。それなら、三〇〇〇m級の山々が取り巻く黒部川をテーマとするのが面白いのではないかと。そういう考えから、黒部との本格的な付き合いがはじまりました。

しかし、ほどなく鹿島槍ヶ岳の怖さや冬山の恐ろしさを実感する羽目になります。撮影を始めて一年ほどした年末の山行で、劔岳北

方の毛勝岳の大明神尾根を登山中に雪庇を踏み抜く事故を起しました。入山一日目の最後のふんばりの最中でした。雪面の前方から切れ目が入り、雪庇もろとも落下し、雪崩に巻き込まれながら滑落しました。幸いごく軽いすり傷を負っただけで済んだこともあり、あまり気にも留めていませんでした。さすがに、雪稜での行動は以前より慎重になりました。雪が、歩けないということはありませんでした。ところが、それから二年程経ったある夜中、ふと目覚め、自分の立っている雪面がわずかばかり沈んだという鹿島槍ヶ岳冷池での感覚が蘇ったことがあったのです。自分としてはすっかり忘れていたはずの記憶です。それが、自分で起した事故の体験と結びつきました。あつたとき、雪庇にのつかっていたんだ。たまたま、切れ落ちずに済んだ。少し沈んだという感覚が妙に生々しく、恐怖感を伴い蘇りました。恐怖感ほそれだけに止まらず、広がってゆきました。首までの新雪に埋まりながら、なおかつ足場が定まらない状態で赤岩尾根をトラバース気味に下ったことがありました。が、それもそのときとはくらべものにならないほどの恐怖感を伴って記憶の中に再定着してしまいました。雪面に対する底なしの恐怖感に引きずり込まれ、雪山は全く歩けなくなりました。

こうしたことが転機となって、夏の源流域を当面の目標にしました。それとともに、入山路は長野県側から富山県側に移りました。

〔水〕

黒部源流にねらいを定めても、その豊かな表情はそう簡単には見つかりませんでした。むしろ、意識が上滑りしました。源流の山々にも秀峰はたくさんあります。が、おしなべておとなしい。山の形に囚われなさと格好のいいことを言いましたが、やはりどこかで山の形や彩りに無意識の内に頼っていたことに気付かされました。稜線とは違つて沢に入れば、条件が変わつて何が撮影できたかという、それもありませんでした。単に沢を登るだけでは、どうしても景観を意識してしまいました。撮影は完全に行き詰まってしまうました。

あがけばあがくほど、黒部を掴む手がかりは一向に見えて来ませんでした。源流の稜線を行き来しても、上廊下を上り下りしても、ごくごくありきたりのスナップ写真が手元に残るだけでした。黒部の何たるかが見えた気には一向にならなかつた。それでは自分が黒部で写真を撮る意味がありません。そもそも、自分には写真撮る資質があるのだろうか。自問自答せざるを得ない日々が続き、自身を見失つて、底なしの地獄にもはまり込みました。その不満や不安は源流域の山々に向けられました。薬師岳は雄大に過ぎるし、雲ノ平はだだっ広いだけの台地だ、等等など。

途方に暮れたまま時間だけが過ぎていきました。それでも通い続けたのは面白そうなのかのテーマを見つけれなかつたこともありませんが、このまま退くことはできないという意地だけだったかも知れません。通い続けてはい



〔水の表情〕

ましたが、駄作すら手元に残ることも少なくなつてきました。しかし、諦めず通つたお陰で、人間関係は徐々に広がっていきました。

黒部源流には、イワナがいます。大町の職漁師がいたころから黒部のイワナはブランド品でした。イワナを目的にくる釣り人達も多い。そうした彼らの中に溪流の楽しみ方を教えてくれた人達がいいたのは非常に幸運でした。別に、カメラを置いて、釣り竿を持つとしたわけではありません。イワナを釣るには、溪をよく知り、心から楽しむことなのだということなのです。

写真を撮らなければという意識を捨て、ただただ、源流をさまよい歩くことにしました。そんなある日、朝の斜光線を受けて流れが光



「雪の表情」 積った雪の表面が解けて再び薄い氷の膜を作る



「水蒸気の表情」 薬師沢出合で霧(水)が大気にもどる

輝く場面に出くわしました。それを何とか一枚の絵にすることが出来たことから、関心は急速に水の表情に向かつていきました。絵になる景観ばかりを捜し求めていたので、どこもなく高みから見るところがあったのかも知れません。黒部と自身の間にいつの間にか目には見えない距離が出来ていたのではなからうか。いつしか、形を作ろうとして心の柔軟性を失っていたのかもしれない。それが、時には身の半分以上を黒部の水に浸したりすることが当たり前になることで、身も心も動かされ、目線は水や流れに近づき、その見えない距離感が消えていった。醒めた目も必要な場合がありますが、純粹に心が動くことそして、それに反応することは大変重要です。そうはいっても、いくら流れの中の水の表情が豊かで、それらに心が動いても、それだけで黒部を描くことは難しいことです。黒部の中で水がどのような役割を果たしているかを考えることも、そしてもっと別の水の表情を見つけたす必要も出てきました。

再び、稜線歩きをはじめました。夏の朝、薬師岳の山頂からは後立山の峰々が少し霧がかかって見えた。透明感がなく、山の写真としては相応しくありません。以前なら見向きもしなかったでしょう。しかし、水というキーワードを持ってみると、それはなんと素晴らしい景観でした。こんな水の在り方があったのか、雨が降ることか雪だけが、そしてそれらが解けたり流れたりすることだけが水の表情ではない。ここ暫くの自身の見る目の貧困さに気付かされました。もう以前のようには焦燥感に駆られるだけで、何も目に飛び込んでこないという状況はなくなりました。方向性のある関心を持つと、大きな広がり

「岩」 黒部に入りはじめたころから、気に入って

できる。山岳を装飾するに過ぎなかった雲も大きな意味を持って飛び込んでくるようになりました。

水を介することで、黒部はその姿を明かしはじめたと思えました。山が、高山植物が、流れが、雲が、水を軸に、ひとつの系を形成している。そうした見方や考え方に立つと、黒部の稜線から夕色に染まる西方の眺めは、はるか先、日本海にまで意識をおし開けます。そして、更に地球的規模の繋がりまでも感じさせてくれます。意識の中にゆらゆらと立ち現われていた水の循環という意識が、やがて確たるものになっていく。

二〇〇〇年、写真展「源流—黒部にて—」を開催。

二〇〇四年、北日本新聞社が創刊二二〇周年の記念事業として立山黒部の写真集を出版することにになりました。既視感のないものとするということで、黒部の水の写真が評価を頂き、水の章を担当することになりました。その水の章を雪水学的見地から解説されたのが、立山カルデラ砂防博物館の飯田肇学芸員です。

その本のなかで、黒部を「水のめぐり」という軸で解説していただき、更には、水圏という地球的な規模にまで拡張していただきました。黒部で、黒部源流で眺め、感じて、撮影してきたことを科学的に整理し、補足し、裏付け下さったと思っています。

そうしたこともあって、今回の「水」の写真展の監修をお願いしました。単なる、山や水の心象風景としてでない展示が出来ればと考えています。

いる場所が二ヶ所あります。高天原と黒部五郎岳のカールです。どちらも、少し囲まれた感じがする地形で、水があり、高山植物も生い茂っていて、抱かれたような安心感のある落ち着いた場所です。京都の市内で育ったので、盆地状の地形に馴染んでいるからかも知れません。何度となく通っていました。黒部五郎岳カールの中にある大岩が突然、目に飛び込んできました。二十一年に一度あるかないかの鮮やかな紅葉に囲まれたその様子は移ろうものと動かざるものとの見事な対比をなしていました。それからは、前を通る度に、その岩を気にかけて見るようになりました。「岩」への関心が芽生えました。ところが、当初のどっしりと鎮座している感じとはうらはらに、見れば見るほど、その岩自体には、安定さとは異なるものを感じてしまうところ



「黒部五郎岳カールの雷岩」





「上ノ廊下」浸食作用を受けてV字型の谷ができる

が出てきました。岩の在る場所や形です。本来その場所になかったものが或る時期に移動してきたのではないか、という疑問が湧いてきました。それはとりもなおさず、大岩の出自をあれこれ推測することでもありました。水河地形の中の大岩が契機となつて、山の、北アルプスの成り立ちへの関心が徐々に大きくなって来ていました。そんな折、先述しましたが、北日本新聞社が立山黒部の写真集を出すことになり、「水」の章以外にも一章担当させていただくことになりました。「大地」の章です。立山カルデラ砂防博物館の菊川芸員のご指導をいただきながら、改めて、黒部川流域や立山に接することになりました。地質科学的な時間の経過に思いを馳せると、動きのない景観にも心が動くようになり、人が多くて敬遠してきた弥陀ヶ原や立山が、新鮮で面白い景観となって目に映るようになり



「下ノ廊下」異なる岩質の境目を深い深谷が走る

ました。山を歩いていて、どうしてこんな地形になっているのかと疑問に思っていたことが納得出来ることは、山岳で練り広げられる様々な自然現象の変化に心を動かされるのは、また異なった面白さです。それは同時に、立山黒部の理解を一層深めることでもありません。黒部川が地質科学的にどのような意味を持つのかは、私達が生きている日本列島の生い立ちそのものに触れることにもなるはずで、残念ながら、私達には、身の回りにそうした手がかりを見つけることも、関心を持つこともなかなか難しいことです。その意味でも、黒部川が遙かな歳月をかけて、削りに削った地形や、剥き出した太古からの地層の断面や岩塊は得がたいもののようなのです。地質科学的な関心や面白さを一層倍化させてくれたのが、知人から教えてもらった信州大学の原山教授の本「超火山槍・穂高」でした。その本の中には、黒部川流域、特に源流域も大変興味深い所として触れられていました。信州の大町山岳博物館でやる今回の写真展「[石]」では、黒部源流域で主に撮影してきた写真が地質科学的にどのような内容を含んでい

るかその原山教授に解き明かして頂く展開になります。自分自身もワクワクしています。結びに 少し偉そうな話になりますが、写真を撮るということはどういう事なのか考えてみたいと思います。自身の経験では、山を対象にすると、どうしても自分自身が相対峙しなければならなくなってしまう。対峙する自分が十分に豊かななら、それもいいでしょうが、ここに散らばる素早く変化してゆく豊かな自然の表情を追うのはなかなか難しい。時の進行とともに練り広げられる自然の連続的な変化の中に身を置き、ひたすら自らの感覚を研ぎ澄まし、現象の垣間見える瞬間を感じ、それを映像として切り取る。その撮ったものを改めて眺める。そして、それを他者の知識と交わらせたりしながら、自ら撮影した写真を理解すれば、その持つ意味を明らかにすることが出来る。それを他者の目に晒す。そうすることで、何かを伝える可能性が高まるのではないかと考えています。今回の写真展では、飯田先生と原山先生という高い知見の持ち主に

ご協力いただいて、「水の循環」や「黒部の来歴」といった大きなテーマに取り組んでいます。写真などの力不足は覆い隠せませんが、大町山岳博物館の強力な後押しで、通常の「山岳写真」とは一味も二味も異なる写真展を開催出来ると思っております。 大町は、立山黒部アルペンルート東側の玄関口です。お土産店などにも「黒部」が溢れ

ています。しかし、源流域や後立山に出入りしていたイワナの職漁師や猟師達は既に亡くなり、電源開発工事も過ぎ去った現在、黒部の文字の氾濫に反して、大町にとって、「黒部」は非常に遠い存在になってしまっているように見えます。黒部をどう捉え、今後、どのような関係を切り結ぶのか、新たな視点が必要とされる時期にきているのではないのでしょうか。 自身にとって馴染みのある大町の山岳博物館で写真展を開くことが出来るのは大変嬉しいことです。そして、今回の一連の写真展が、改めて、「黒部」に目を向ける機会を提供することになれば、一層喜ばしいと思っています。稜線を越えはするけれど、その影響を多大に受けているすぐ隣の黒部川流域の魅力ばかりでなく意義をも明らかにする一助にはなるのではないかと考えています。ぜひ、ご来場下さいますよう、ご案内申し上げます。(もりしたきよう/写真家)

森下 恭/MORISHITA Kyoh

京都市生まれ

一九八一年三月 東京新宿三ツツクサロンにて写真展「後継影映」開催

二〇〇〇年七月 東京新宿ベクタックスフォーラムにて写真展「源流-黒部にて」開催

二〇〇四年六月 東京ホテルクラブ渋谷店にて志水哲也氏との二人展「黒部源流と幻の滝」開催

二〇〇四年八月 北日本新聞社より「大いなる遺産 立山黒部一〇〇万年の輝き」共著 刊行予定

大阪府富田林市在住

山と博物館 第49巻第7号

発行 二〇〇四年七月二十五日発行

〒388-0002 長野県大町市大字大町八〇五六一

市立大町山岳博物館

TEL 〇二六-111-1111

FAX 〇二六-111-1111

E-mail:sanpakku@city.omachi.nagano.jp

URL:http://www.zetisyonachinagano.jp/sanpakku/

印刷 株式会社印刷

定価 年額一、五〇〇円(送料共一切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五四〇七 一三三九三